

プロローグ

ゴーストの囁きを聞いたことはあるだろうか。

そう、低レベルでスケスケのモンスターだ。

あれはまだ自然を司る精霊の加護がかりうじて残っていて、世界が荒廃しきっていない頃の話。貴族に義務付けられた聖別によるスキル調査も終わっていないときなので、六歳か七歳ぐらいのことだったと思う。

いつものように父の書庫に忍び込み本を読んでいた所、どこから迷い込んだのか一匹のゴーストが部屋の片隅に浮かんでいた。僕は声をあげるのも忘れてそれをただ呆然と見つめる。

少し前に読んだ魔物大全によると、ゴーストは人の命を奪うほどの力は持っていないが、触った相手の精神力を吸い取って昏倒させる「ドレインタッチ」という力を使用するらしい。捕まった場合はそのまま書庫で倒れ込むことになり、夜にはメイドの折檻フルコースと父のゲンコツを添えてくを味わうことになるだろう。

僕は足音を立てないようにそりそりとゴーストの横を通って部屋のドアに手をかけた。

すると僕の耳に、か細いつぶやき声が聞こえた。それが何と言っているかはわからない。

だが僕はそれになんか興味を持った。ゴーストが言葉を喋るなんて、どんな本にも書いていなか

ったからだ。僕はその声の源に少しだけ近付いて耳を澄ませる。

「……て……だ……さい……」

もう少し……もう少し近付けば聞こえる……。

手を伸ばせば届く距離まで近付いたとき、ようやくその言葉を理解できた。

「……へそつて嗅いだらスツゴクくっさい……」

「——知るか！」

思わず叫んで部屋を出た。その声で書斎に侵入したことがバレて叱られた。

そんなことがあつた後に神殿で判明した僕のスキルは「靈感」だった。どうやら僕にはアンデッドの声を聞く力があるらしい。

それからもちよくちよくゴーストの声を聞く機会があつた。でも彼らは普段から何も考えていないようで、ことあるごとに僕は無駄な知識を頭にぶち込まれて不快になるのだった。

そんな無価値なスキルしか持たない僕を尻目に、優秀な兄たち二人はそれぞれの道を歩んでいった。長兄は父の後を継ぐために貴族としての社交スキルや領地の管理方法を。次兄は騎士を目指し剣術の研鑽を。二人とも立派で、僕も鼻が高いというものだ。

だが肝心の僕はといえば——。

「さて、セーム。ここに呼ばれた理由はわかつているな？」

既に五十も近い父が自室の机に座つたまま、激しいプレッシャーを放っている。

「ええっと……その……」

「二十もとうに過ぎて領主としての仕事を手伝うわけでもなく、かといって次兄アレッズのように手に職を付けるでもなく……」

「ううっ！ 父上、すみません持病の腹痛がっ！」

何とか切り抜けようと腹に手を当てるが、僕の声を遮って父はドカンと机を叩いた。

「この穀潰しが！ もうよい！ 貴様は明日からロージナで暮らせ！」

「……は？ ま、またまた父上、そんな御冗談を——」

「冗談はお前の普段の暮らしぶりだけで十分だ！ 我が家にお前を養うような余裕はもう無い！」
……取り付く島もなさそう。……というか、これ以上何か言ったら壁に飾られている剣を抜き、父が襲いかかってくるかもしれない。

僕は父の機嫌が直ることを祈りつつ、その日はおとなしく自室へと戻ったのだった。

——しかし思いの外、父の行動は早くって。

次の日の朝に起きてすぐ、荷物をまとめさせられたと思ったら即座に馬車に押し込まれた。

「坊っちゃん！ これを！」

長年世話になった乳母から手作りのクッキーの包みを受け取る。

「坊っちゃんお体にお気をつけください！ 坊っちゃんひ弱なのですぐに死にそうですが、どうかお悔いの無いよう！」

普段から散々な言いようだったが、別れ際まで酷い言いザマだ。

「……絶対戻ってくるからなー！ 憶おぼえてるよ父上——！」
僕は恨み言を叫びつつ、最果ての地ロージナへと送り出されたのだった。

第一話 靈感貴族の開拓宣言

最果ての地、ロージナ。

人類と魔族は十年ほど前、その存亡をかけて戦争を繰り広げた。しかしその戦いの最中、両者白熱しすぎてついうっかり自然を司る元素精霊たちを滅ぼしてしまふ。当然自然の加護は消え去り、世界には荒野が広がった。それに慌てた人類と魔族は急速休戦協定を結び、世界に自然を取り戻すまではお互いに干渉しない取り決めを交わす。

人の住む地と魔族の居住地、そして無限に広がる荒野の境界線。そこにある開拓村、それがロージナだった。

丸一日馬車に揺られて僕はその地にたどり着く。

持ってきたのは着替えの他に、こっそり溜め込んでいた金貨三枚分の貨幣とロージナにある別荘の鍵かぎ、そして一本の細剣だ。剣術など一切使えないが、護身用……というより剣を持っていることを見せて威圧するための品だ。……どれほどの効果があるかはわからないのだけれど。

その村は一見して人が住んでいるように見えませんが、最近はめっきり産出量も少なくなり税収も減っている……らしい。兄上から聞いた話なので詳しくは知らないのだけれども。

既に日も傾きかけていたが、これから住む村の様子を調べるために村で唯一の食堂へと向かった。ボロボロの扉を開くと、既に酒盛りをしていた幾人もの労働者が余所者に視線を向ける。僕はまるで実家で父に視線を向けられたときのように身体を強張らせつつ、店の隅のカウンター席へと座った。内装は年季が入っていて薄汚かったが、数十人は余裕で飲み食いできるぐらいの広さがあった。

ぼんやりと店の様子を窺っていると、奥から給仕の女性が出てくる。

年の頃は僕より少し上、三十に届かないぐらいだろうか。金髪の長い髪はまとめあげられており、その大きな胸を色あせたエプロンが覆っている。顔も美人の範疇に入るだろう。

彼女は見下すように僕の風体を観察すると、ぶっきばらぼうに言葉を放った。

「……注文は？」

「……えっと……水、と……お腹を満たせる物を……」

注文を持ち帰り数分後、彼女は水と一切れのパンのようなものを僕の目の前に置く。

「銀貨二枚」

「えっ……!?!」

つまりは銅貨二十枚。相場の十倍程の値段だろうか。

ポツタクリとは思ったが、ジロリと見つめられおとなしく銀貨を二枚渡した。

「……お前さんどこから来たんだい？ 宿は？」

「あ、えっと……街の方から……。なんでも西の外れに屋敷があるとかで、そこに泊まるうかと

……。し、知ってますかね？」

声を裏返らせながらそう聞く。父の話によれば、村の西側に長年使われていない別荘があるらしい。僕の言葉を受けて、給仕の女性は訝しげな顔をした。

「あのボロ屋敷に？ たしか領主サマが管理をすっぱかしてる家だった気がするけど……」

「あ、はい。実は僕、領主の息子で——」

その言葉で店の中の空気が変わった。客の視線が僕に集中するのを感じる。そこにはまるで敵意のような雰囲気があった。

——もしや父上、嫌われてる？

一切の政まつりごとに関わらず、本ばかり読んでいたツケが回ってきたらしい。実は父上は悪徳領主だったのか。いや、僕を家から追い出すぐらいだからきつとそうに違いない。なんてこった血の因果！
僕は悪くない！

彼らの視線が僕を射貫く。ここにいる労働者たちにタコ殴りにされたら生き残れるかすら怪しい。無理だ！ ムリムリ、絶対無理！

僕は慌てて口を開く。

「——その！ ……皆さんの！ 生活を！ より良くするために来たんです！」

僕の言葉にぞわ、と酒場中にどよめきが広がった。

「無理な徴税！ 無茶な労働環境！ そんなものを一掃するため、わたしは尽力いたします!!」

口からどどんと言葉が出て来る。

若い頃から放蕩息子となじられ続けた僕にとつて、これぐらいの言い訳や逃げ口上は朝飯前だ！
秘技・具体的なことは何も言わない！

僕の演説が一息つくと、給仕の女性が声をあげた。

「ほ、本当かい……!?!」

女性につられ、店にいた客が口々に言葉を続ける。

「最近まには金もほとんど取れないし税を納めるどころじゃなかったんだ」

「作物を育てようとしても上手く育たねえし……」

「はは！ きっと嘆願書が届いたんだ！ 俺たちの苦勞が伝わったんだよ！」

「街ウルブスにいてカネのことしか考えてねーと思つてたが、領主サマもきちんと俺らのこと考えてくれるんだな……」

「遠いところありがとよ坊主！ いや坊主ちゃんか!? ほら飲め飲め！ 領主サマに乾杯だ！」

男たちが手持ちの酒を勧めてくる。店の中の空気が変わったのを感じた。

——な、何とかこの場はやり過ごせたようだった。言葉選び、大事。

……まあ嘘は言っていない。父にこの地へ行くよう命じられたのは本当だ。であれば、僕がやるべきことはのほほんと彼らの生活を眺めることではなく、彼らの抱える問題を解決することではないだろうか。

——ていうかこの村、かなり切迫してない？ 父上、僕なんかを送り出して本当に大丈夫だったのだろうか……。……単純に追い出されただけの線もかなり濃厚な気がしてきた。

自身とこの村の行く末に不安を抱きつつ、僕は出されたパンのような固形物を口に運んだ。
……んんん。

それはこの辺の地方で作られるパンで一種の保存食だった。多数の雑穀を茹でたあとに発酵させ焼き上げたカチカチのパンで、その最大の特徴は……。

「……酸っぱい」

酸味とほんのりした腐敗臭が口の中に広がる。咀嚼しなければ呑み込めない硬さのため、僕は水を口に含みふやかせつつそれを食べていった。

……つらい。これは何かの拷問だろうか。

苦しむ僕のそんな様子を見て、酒場の女将らしきパンを運んできてくれた女性は苦笑する。

「……この村はどこも生活が苦しくて水も少なくてね。まともに食べられるようなものはそんなものしか準備できないんだ」

彼女の申し訳なさそうな表情に、僕も顔を引きつらせながらも笑みを返した。

水の不足。交易路の未発達。それらがこの村に食糧難を生み出しているようだ。

……まずは食べ物をなんとかしないと、村の産業どころじゃあないぞ……。

なによりも毎日こんな食べ物ばかりを食べていたら、生きる気力が湧いてこなくなってしまうぞうだ。

——美味しいものとまでは言わずとも、せめて普通に食べられるものが食べたい……！

僕は実家でのそれなりに豪華だった食事を思い出しつつ、もそもそとパンを食べるのだった。

その屋敷は村の外れにひっそりと立っていた。

木造建築の大きな家で、随分と築年数が経過しているのがわかる。

実家の屋敷ほどではないが、さきほどの酒場と同じかそれ以上には大きいだろう。

さっそく、預かっていた鍵を使って中へと入る。どうやら荒らされてはいないようだ。

壁にかけられていたランタンを手取る。備え付けの魔導着火器のスイッチを押すと、ランタンに残っていた燃料が異臭を放ちつつも燃えだした。

……こんなときに魔法が使えればランタンを持ち歩く必要もないのだけれど。

魔法の行使には生まれつきの素養と知識が必要だ。とはいえこのような魔道具があることで、あの程度はその恩恵に授かることができる。

暗がりの廊下を進み、それぞれの部屋を確認していく。

……正直言って、それは大変恐ろしかった。

いつ扉の陰から異形のモンスターが飛び出してくるのかと思うと気が気ではない。実際にこんな村の中でモンスターに出会う可能性は高くはないだろうが、それでも怖いものは怖い。

三、四部屋見たところで客室のような部屋を発見した。家具も残っており、カビ臭いとはいえそのホコリが積もったベッドも使えなくはないだろう。

僕は疲れ果ててベッドに腰掛けると、懐から乳母にもらったクッキーの包みを取り出した。横のテーブルに包みを置き、そこから一つ取って口に運ぶ。

……美味しい。

あの家で僕を心配してくれたのは彼女だけだった。乳母の顔を思い出し、クッキーの味を噛み締める。

——しかし本気で現状はまずいな。

たしかに僕はこの村へと送り出されて来たわけだ。しかも護衛も付けずたった一人で。

でも税率に口を出す権力なんてあるわけがない。そして持ってきた金も、あの酒場の物価で暮らすとすれば一月もしない内に消え去ってしまうだろう。おそらくはあの物価はよそ者の値段だが、値切れるような信用も僕にはない……。

かといって領主（交）に隠れて税を余分に取ったりしたら、この村の住人にタコ殴りにされて最悪そのまま行方不明になることだって考えられる……。

うああ絶望だ！ くそっ、貴族の三男なんて政略結婚で婿入りでもしてのんびり暮らせるんじゃないのかよ！

これも全部不景気が悪い！ 世界が悪い！ ちくしょうちくしょう！

そうして僕が頭を抱えていると、カサカサという音がテーブルの上から聞こえた。

虫？ ネズミ？

嫌な想像をしつつ顔をあげると、目に入ったのはクッキーに伸びる人の手。

そのまま視線を動かすと、そこには一人の少女がいた。

肩上まで伸ばした黒髪に、赤色のワンピースのような前開きの襟を帯で閉じる独特な服。年の頃は十三、四ぐらいだろうか。幼さの残る顔立ち。

パツチリとした印象的な目を大きく見開いて、彼女は驚きの表情を浮かべていた。思わず僕は叫ぶ。

「——ああああああ——!!」

賊？ 侵入者？ どこから入ったの!!? ていうか誰!!?

僕の叫びに呼応するように、少女も叫ぶ。

「あああああ——!!」

僕はあまりの驚きとその声に気圧けおされて、一人ベッドから落ちて尻しりもちをつく。

そんな僕に駆け寄って、少女はひしり、と手を握りしめるとその顔を近付けてきた。

「わたしが！ 見えるんですね！ 声も聞こえる！」

僕はわけもわからずカクカクと顔うなずく。

「お待ちしておりました！ 主様あみださまっ！」

ぎゅっと抱きつかれる。

え、えええええ!!?

柔らかな感触と温かな体温が、腕と胸に伝わってくる。

主、って……僕が雇った覚えはないけど、実はすでに父が手配していたメイドとか……？



いや、鍵かぎがかかっていたし、というか見えるとか聞こえるって、それは――。

どういうことか、と聞く前に身体に変調が訪れた。急速に体の力が抜けていく。

「……絶対に、逃しませんから……」

少女は怪しげな笑みを浮かべた。

ああ、そうだこれは、確か――。

「……ドレイン……タッ、チ――!!」

アンデッドの持つそのスキルの名を口に出す。

彼女に抱きつかれたまま、僕はその意識を手放した。

☆

疲れ果てていたせいか随分と寝てしまっていたようで、すっきりとして目覚めた。

暗い。ランタンがついている。石造り。

は？ 地下牢？

いつもと違う状況を一瞬で理解する。

「おはようございます、主様」

頭の上から可愛らしい声がかげられる。僕は今、黒髪の少女に膝枕ひざまくらをされているようだった。

「うおおおっ!」

慌てて離れ、立ち上がる。誰も入っていない地下牢の前に僕の声が響いた。その様子にくすくすと笑っているが、そう、記憶が正しければ彼女は――。

「――あ、アンデッド……!?!」

僕ドレインタツチ以外には言葉が聞こえない。何年も人が出入りしていない場所に突然あらわれる。そして魔力吸収……。

それらから推測するに、この少女はおそらくアンデッドのはずだ。いや、それにしても僕が知るアンデッドとは全然違うのだけれども。

「……そんな物騒なものではありませんよ。酷ひどいです主様」

彼女は子供のようにぶくうと頬を膨らませます。

「わたしは座敷わらし。この家の守護者です」

「ザシキワラシ……?」

聞いたことの無い名前だ。

ゴースト、ゾンビ、スケルトン、グール……。どうにもそれらの種族は当てはまりそうにない。

「ええ。呼びにくければ、ハナ」とでも」

にっこりと笑うザシキワラシに対して警戒心はなくならない。だって僕がこれまで生きてきた中で意思疎通できるアンデッドなんて存在は、見たことがないのだから。

伝説レベルの話なら、魔術で自身を不死者とする高位アンデッドのような存在は聞いたことがある。しかしその伝承が正しければ、この目の前の存在はいったいどれほどの力を持つのだろうか。

こちらの命を握られているような恐怖を覚え、僕は背筋を震わせる。

「えっと……ハナ、さん……?」

昨夜のようにまた僕の手をその両手で握り、彼女は顔を近づけてくる。

「そんな、呼び捨てで構いません主様!」

若干魔力が吸い取られるような虚脱感を覚えた。僕は魔法を使えないから、多少吸われる分には問題はないのだけれど。

「わ、わかった、わかったから、少し離れて! 君に触られるとどんどん魔力が吸い取られるから」

僕の言葉に彼女は慌てて手を離す。

「わたしたちならなんてはしたくないことを。申し訳ありません主様」

顔を赤らめる彼女と対照的に、僕は顔を青褪めさせていた。

……どうやら彼女に敵意はないし、こちらの言うことも聞いてくれるようだ。となれば、一つ一つ疑問を晴らしていくのがいいだろうか。

「……ま、まず、キミ。ザシキワラシって何? アンデッドではないの?」

「座敷わらしは、住む家に幸運をもたらす妖怪です」

うーん、わからない!

ザシキワラシという専門用語を聞いたら、さらにヨーカイという専門用語が出てきたぞ!

これはここを突っ込んで聞くよりも、違うことを聞いたほうがいいのかも知らない。

そもそも人間に「人間って何？」って聞かれても困るだろうな。

「僕って何？」って聞かれたら「穀潰し！」って家族は答えるだろうしね！　ハハハ！

……辛い。

「君はいつからここに？」

「ずっとずっと昔です。前の主に、行き場の無くなったわたしを召喚していただいたのです」

果たしてそれはいったいどれぐらい前のことなのだろうか……。

「……とはいえその主は正しくわたしを認識できなかったのですが。たまに波長があつた夜にしか声も姿も感じられないようでしたので、こっそり悪戯して遊んでいたら出ていってしまった……」

わあ、迷惑。こんな広い館の夜、少女の声や姿が見え隠れしたらそりゃ怖いだろう。

「そうこうしているうちに、家の持ち主が替わつたのを雰囲気で感じました。わたしは家を依代にしているため、家の主こそがわたしの主様なのです」

そう言つて彼女はじつとこちらを見つめる。

……正確には父上が主の気もするが、細かいことは気にしないでおこつ。

実際に住むのは僕なのだし。

「……あ、主って何をしたらいいの？　お給料は払えないんだけど……」

そんなお金などない。明日の暮らしすらおぼつかないのだ。

かといって無償で主人と認めてくれるなど、そんな都合の良い話もないだろう。

「……はい。対価としてわたしが求めるのはこの世に存在するための妖力……こちらでいう魔力で

す」

彼女は僕の顔色を窺^{うかが}う。

「この屋敷にいる間は消耗しませんが、十分な魔力がなければこの館が朽ち果てたときに消えてしまいますし、他に移ることもできません」

彼女の言葉に、触れ合ったときに肌越しに魔力が吸われたことを思い出す。

「……つまり僕の魔力を根こそぎ奪いたいってこと……？」

「滅相ありません！ 昨夜はその……久々の魔力に触れたことで、水を吸う高野豆腐のように体が勝手に求めてしまつて……ごめんなさい」

彼女は恥ずかしそうに顔を赤らめた。

コーヤドーフとやらが何かはわからないが、おそらくスポンジの一種だろう。

僕は魔法の才能がないので、気を失わない程度に魔力を吸われる分には全く問題がない。彼女としても、滅多に訪れない屋敷の主が靈感スキル持ちというのは都合が良いのだろう。靈感自体を持つ人間というのは珍しくはないが、スキル判定で認識されるほどの大きな靈感才能を持つ人間はほとんどいない。

「……まあ日常生活において一切役に立たないので、そもそも他人に申告しない人も多いのだけだ。」「……それで、僕が主になったら君は何をしてくれるの？」

ゴクリ、とつばを飲み込んだ。いや、決してやましい気持ちはないよ、うん。ほんとほんと。

「……あなたのお傍に仕えます。どのような困難^たが立ち塞^{ふさ}がるかと、必ずやあなたの望^{ねが}みを叶^{かな}えます

しよつ」

少女はその瞳に決意を湛えてそう言った。

……彼女はおそらく上級のアンデッドレベルの力を持っている。彼女と主従関係を結べば、兄たちのように魔法や剣術の才能が無い僕でもこの地で生きていけるかもしれない。そして父を見返してやれる可能性だってあるだろう。

僕は覚悟を決めて、ゆっくりと頷いた。

「わかった。僕が責任をもって君の主になろう」

「……ありがとうございます。では、こちらにサインを……」

サイン？

彼女は地下牢の奥の壁に近付くと、その石壁を押した。その壁は隠し扉となっており、回転する。そうして隠された小さな空間にある棚から、一冊の分厚い本を取り出し持ってきた。

その本は赤い装丁で、表紙に文字は書かれていない。まるで高級な日記帳のようだ。

開かれた最初のページには「契約者」と書かれている。少しためらいつつも、僕は周囲を見回し筆記具を探す。

「……あら、では失礼して」

彼女はペンの類が無いことに気付くと、おもむろに僕の人差し指を口に啜えた。

「——ッつー！」

少しだけその先端に痛みが走る。彼女が口を離し、唾液が糸を引いた。人差し指からは少量なが

ら血が出ている。

「……さあ、どつぞ」

ハナは薄い笑みを浮かべる。

彼女に促されるままその指で本のページを触ると、それは金属のように血液をはじいた。そしてその血はまるでペンとインクのように指の先端に集結して留まる。

僕は指を滑らせて、自分の名前を書き込んだ。

——セーム・アルベスク。

名前を書くとき血文字が赤い光を放ち、辺りを照らす。そしてすぐに光が収まると、まるで最初からそこに書かれていたかのように血が定着して黒く変色した。

「……これで契約完了です。主様」

ハナと名乗ったザシキワラシの少女は、僕の手をとる。

「ありがとうございます——。この数十年間、大変孤独でした」

見れば、うつすらとその瞳には涙が滲^じんでいた。

いったい数十年の間の孤独というのはどれほどに辛いのだろうか。

しかし僕にはそれを押し量^{すく}る術はない。

僕は何もできない。得意なこともないし、頭だつてそれほど良いとはいえないだろう。そんな僕ができることと言ったら……。

「……これから末永くよろしくね、ハナ」

彼女に笑顔を向けた。

僕ができることといったら、安心させる言葉をかけることぐらいだ。

彼女も笑みを浮かべる。目じりには一雫の涙。

「はい！」

こうして僕とハナの契約は完了した。

少なくともこれで、僕もハナも孤独から解放されることだろう。

☆

僕はハナに案内されてリビングへと移動する。

窓から光が差し込んでいる。どうやら僕は朝まで眠っていたらしかった。

テーブルを挟むようにして、そこにはソファが置かれている。どうやら年代物のようでひどくカビ臭かった。

「少々お待ちくださいね」

彼女が優しくぼんぼん、とそれを叩くと、まるで水面に波紋が広がるようにソファが綺麗になつていく。それは瞬く間に新品のようなソファへと姿を変えた。

「こ、これは……魔法？ ……修復……というよりは時間逆行か……？」

いや、そんなはずはない。魔法には詳しくないが、そんな魔法が使えるのは魔王クラス……いや

現代の魔王ですら使えないだろう。

ちらりとハナの方に目を向けると、彼女は自慢げに鼻を高くしていた。

僕の視線を感じ取り、ハナはコホン、と咳払いせせき払いを一つする。

「わたしの力は……こちらではスキルと言うのでしたっけ」

彼女はこちらの反応を窺うように、僕の目を覗き込んだ。

「——それは、『家内安全』」

ハナはそう言うと、自信有りげな笑みを浮かべた。

「家の中のことであれば大抵のことはお任せください。少々魔力を使用しますが、たとえ焼夷弾しょういだんが落ちてきたところであなたの身を守りましょう」

彼女はそう言うにつこりと笑う。

シヨードダン。またわからない単語が出てきたが、おそらく隕石いんせきかなにかだろう。きつと大袈裟おおげさに言っているんだと思う。

「……ああ、それなら——」

家の中のこと、と言われて僕は望みを口にした。

「——飲み水とかも用意できるのかな？ 喉のどが渴いちゃってさ」

思い返してみれば、昨日屋敷に着いてからは水分を摂取していない。王都と違って上下水道が整備されているなんてことはないだろう。しかし彼女の力ならもしや食費を浮かすことができるのでは——？

しかしそんな僕の期待を打ち砕くように、彼女はスツと目を逸らした。
「えっと……屋敷の中に井戸はありませんので……」

無理らしい。

まあそれはそうか。

諦めて酒場に水を分けてもらいにいこう。
あきら

「そっか。じゃあ外に出てくるよ。ハナも行くかい？」

僕の言葉に彼女はまたもバツが悪そうに視線を逸らす。

「す、すみません。わたしは家の外に出ると魔力を消費するので……せっかくの主様からの魔力を無駄遣いできません。どうしてもとおっしゃるなら付いていきますが……」

「いや、そこまでじゃないよ」

よく考えたら他の人には見えないのだから、彼女を連れていたら誰もいないのに会話する変人と思われるかもしれない。

僕は彼女に留守を任せ、酒場へと向かうのだった。

しかしその歩みは村の中央広場で止まることになる。

そこには何人かの人間が井戸のある中心部に集まっていた。昨日の酒場の女将もいる。

「……どうかなさいましたか？」

声をかけると彼女は笑顔を見せてくれた。しかしその表情にはどこか陰りがある。

「井戸がね……枯れたんだ」

彼女の言葉を皮切りに、そこにいた人々が次々と口を開く。

「ついに井戸が枯れたか……いつたいどうするんだ」

「どうするってどうもこうもないでしょう。……南の村の井戸から汲くんでくるしかない」

「冗談だろ!? それだけで一日仕事になっちまう」

「かといって他に手はないでしょうさ。ここ以外に井戸を掘るたって、昔と違って精霊魔術は使えないんだ」

「運ぶ手段は？ 一度に運べる量にも限度があるだろう」

「何とか馬車かなにか手配できればいいんだけど」

「定期便に乗っけてもらうとかは？」

「でもそれには金と水樽みずたるが……」

その名の通りの井戸端会議を横目に、そつと僕は館へと戻った。あんな状況で「水を分けてください」なんて言えるわけがない。

しかしどうしたものだろうか。水が飲めないのは生命の危機。それは僕だけでなく、村人のみんなの危機だろう。何か僕にできることはないだろうか。

館のリビングでソファアに腰掛け悩んでいると、ハナが赤い本を持って現れた。

「あれ、お疲れですか？」

「ああ、疲れたってわけじゃないけど……喉の渇きは潤せなくてね」

僕はハナに先ほどの出来事をかいつまんで説明した。

「……そうですか。井戸の水が」

彼女は僕の話を受けてしばし考えたのち、手に持った本をテーブルの上に広げる。

「ならば主様、新たな妖怪を喚んでみるのはいかがでしょう」

「妖怪を……呼ぶ？」

「はい。こちらの本……レメゲトンは異世界から妖怪を召喚することができる契約書なのです」

異世界からヨーカイ？

この本はハナと契約するだけの本というわけではなかったのか。

「なので一度契約いただいた主様には、魔力供給と引き換えに新たな妖怪を喚び出す権利が与えられます。ただし——」

ハナは人差し指を立てる。

「彼らが主様に従うかは契約しだい。中にはタチの悪い妖怪もいるのでお気をつけください。化け狐や絡新婦は性悪です。おすすめしません」

彼女は眉を寄せて忠告した。過去に何かあったのだろうか。

「……とはいっても、僕はヨーカイがいったいどんな力を持っているのかもわからないよ」

召喚しろと言われても、魔族やモンスターならまだしも全く知らないヨーカイ相手では——。

「大丈夫です主様。我々、百鬼夜行の妖怪たちについてはこの書に記載されています。あとは主様がどう存在定義するかの問題です」

「……存在定義……？」

「はい。わたしたち妖怪は本来とても胡乱うらんなものです。この世界においても依代よしろがなければ安定して存在できません。そんなわたしたちを固定するのが認識の力です」

「ちよ、ちよっと。もう少し易しく喋しゃべって……」

ハナはついていけない様子の僕を見て、人差し指を口元に当てて悩むように首を傾げた。

「……主様がー、この子たちにー、ぴったりのスキルを、決めてあげましょうねー？」

まるで幼児をあやすような、やたら甘ったるい声でハナは優しく言った。

「うんぼくわかったー！」

僕は右手をあげて元気よく答える。ハナはその様子にくすくすと笑った。

……はっ！ いま一瞬、僕の知能が著しく低下していた気がする！

ヨーカイというやつは、なんと恐ろしい種族なのだろうか……。

☆

「ん〜……」

ソファアに寝転がりながら、レメゲトンと呼ばれた本をパラパラとめくる。そこには不気味さを感じさせる白黒の絵筆で書かれた挿絵とともに、彼らの名前や詳細が共通語の文字で書かれていた。

妖怪ヨウカイ。

これらの解説の通りであれば、それはやはりゴーストなどによく似たアンデッドの類なのだろう。恐怖や不気味さを感じさせるような異常現象、怪異譚。

性質、存在定義、認識……。

ハナの言葉を頭の中で噛み砕く。

「どうです？ どの子を喚ぶか決まりましたか？」

「……全然」

ハナの言葉に僕は本を顔に被せた。いきなり異世界の魔物を選ぶ、なんて言われてもやはり無理がある。

「……では、運任せにしましょう」

「……へ？」

僕は本を机の上に置いて起き上がる。ハナはそんな僕の横に腰掛けて、手をとった。

「大丈夫です、主様。外でならまだしも、この屋敷の中にいる限り幸運は常にあなたとともにあります」

ハナが僕の耳元に囁きかける。

右手に重なった手から、ハナの体温と魔力の抜ける感覚を覚えた。

「目を閉じて、願いを集中してください。きっと因果はあなたに味方します」

言われたとおり目を閉じて、彼女の手任せて自分の手を前に出す。パラララ、と本のページがめくれる音がした。

「復唱してください。……彼の地よりいでよ——」

「……彼の地よりいでよ」

言葉を紡ぐと、唐突に頭の中に名前が浮かんだ。

「呼んでください、その名前を」

ハナの言葉を受け、頭に浮かんだ言葉を叫ぶ。

「——あずき洗い——」

こめかみの奥に熱い刺激が駆け抜けた。

青白い光が本（シネマト）から放たれる。その光は部屋に広がり、視界が白く包まれたところで一気に収束する。

光が収まると、そこには一人の少女がテーブルの上に立っていた。

身長はハナよりもほんの少し低いぐらい。年の頃も十二、三といったところだろう。紫がかった赤褐色の髪を二房にまとめ、眩（まぶ）しいのかその表情はやや半眼の眠そうな表情を浮かべている。彼女は白と赤茶色のフード付きのチュニックを身に着けていた。

そしてその手に持っているのは、先端（せんぽん）がとるんと丸く膨らんでいる一対の短い棍棒（こんぼう）。

見下ろしたままこちらを眺める彼女に、僕は気圧（けいあつ）されながらも意思疎通を試みた。

「ど、どうも……」

彼女はその棍棒を体の前に出すと、小さく上下に振る。中に砂でも入っているのか、シャンシャン、と音が鳴った。



「……どーもです」

抑揚なく彼女は返事をする。

ど、どうにも表情が読めない……！

困惑する僕の横、ハナが声を上げる。

「アズちゃん！」

ハナが彼女をテーブルから下ろし、そのままぎゅっと抱きしめた。ハナは笑みを浮かべる。

「久しぶりだね！」

嬉しそ^{うれ}うに抱きつくハナとは対照的に、アズと呼ばれた少女はされるがままに無反応だった。

ハナはその歓迎の儀式に満足したのか彼女を放すと、勢いよく手のひらを前に突き出す。

「さあ主様！ この子連れて行ってみてください！」

☆

——あずき洗い。

本によれば彼女はアズキという植物の種子を洗う妖怪だ。

……………。

わからない！ 僕にはさっぱりわからないよ！ どうしろっていうんだ 「種子を洗う能力」っ

て！ 僕は父に「ゴマをする能力に長^たけているよ！ ってそうじゃないよ！ いったいそれが何の役

に立つんだ!?

頭の中でひとしきりツツコミをいれた後、とりあえず僕は本を持って村の中央広場へと向かった。そこには枯れた井戸がある。既に村人たちはいなくなり、今は誰もいない。

「——アズ、この井戸が枯れたんだけど……」

僕の声に応えて、突然何もない空間から彼女が姿を現した。ひしりと僕の腕をつかんでいて、そこから若干の虚脱感が発生する。

彼女は普段、姿を現さない性質の妖怪らしい。どうやら姿を現すだけでも魔力を消費するようだ。その代わりハナと違って外出もできるし、姿を現すときの魔力消費自体も少ないとのこと。

ちなみに契約と報酬については、後払いでいいとのことだった。

……結構ゆるいんだな、契約って……。

彼女は胸の前で小さな棍棒を振る。どうやらそれは楽器の類のようだ。
シャンシャン。

「……そういえば、それは何？」

「マラカスです。中に小豆あずきが入っています」

「そ、そっ」

シャン。

彼女はほんやりと枯れ井戸の方を見つめる。

しかしアズキを洗うだけの妖怪に一体何ができるのだろうか。

「アズ、何とか水を復活させることはできる?」

「……アズのこの世界での存在定義はまだ確立してねーのです。それができるどうかは、^{マスター}主が決めるです」

「え、ええ? 僕が?」

「……う、うーん。意味がわからないぞ……」

「ア、アズ。お願い、やってみてくれないか」

「……むーりです」

スウツとアズの姿が消える。

そんなあつさり……

僕は困り果ててその場に座り込む。

やはり僕のような、才能の片鱗^{へんりん}も無いやつじゃあどうしようもないのか?

そう考えたとき、ハナ的笑顔が脳裏をよぎった。

——大丈夫。

彼女はそう言った。

僕みたいな何もできないやつを考えなんて一切信用できないが、彼女の言葉は信じられる。

僕は気を取り直して本を開き、あずき洗いのページを見た。

そこにはみずぼらしいオッサンの姿が描かれていた。アズとは大違いだ。どうにも水を生み出せそうには見えない。

しかしハナの言葉を信じるなら、今の困難な状況に最適な妖怪が召喚されたはずだ。

……というか、それならなんでもっと水々しい妖怪じゃあないんだ？

伝承にある元素精霊、ウンディーネのような妖怪が出てくるなら話はわかる。もしくはノームとかならどうだろう。地下水を掘り出してくれるかもしれない。

いま必要なのはそんな水を生んだり井戸を掘ったりする力なのに、呼び出されたのは小豆を洗う妖怪だ。

あずき洗いができることなんて、何かあるのだろうか？

シャン、と彼女のマラカスを鳴らす音がどこから聞こえる。その音も小豆だ。彼女が得意とする、小豆を洗う能力で用いる豆。

もしかすると小豆を生み出すことぐらいなら可能なかもしれないが、水を生み出すことなんてできるのか？

たしかに小豆を洗うのは水なんだろうけど……何か違和感がある。どうにも水とは結びつかない。シャン。

なら彼女の生み出すものとは……。

シャン。

「あ……」

彼女がいるであろう空中を見つめる。そこには今現在、彼女が生み出し続けているものがあつた。

——シャン。

「おい、あんた！ 領主の息子の、えーと……」

鉱山の入り口へ足をかけたところで声をかけられた。酒場で見た顔。三十前ぐらいの髭面の男だ。おそらく今から採掘にしようとしていたのだろう。

「セームです」

「おう、俺はエリックだ。それはいいが、坊っちゃんそこは廃坑だ。素人しろうとが入ったら出られなくなるぞ？」

怒られるのではないかと内心ビクビクしていたが、案外優しい口調で話しかけてくれた。

「あ、ちょっと覗のぞくだけです。すぐ戻ります」

「……いいか。絶対に手間はかけさせるんじゃないぞ。廃坑で迷ったら命取りだからな」
彼はそう言って上の坑道へ続く山道を歩いて行く。

……手間をかけるなってわざわざ言ってくれるということは、行方がわからなくなったら捜してくれるのだろうか？

結構優しい人たちなのかもしれない、と思いつつ僕はその中へと入った。数メートルほど先へ進んだところで、彼女の名を呼ぶ。

「アズ」

声に合わせて彼女がその姿を現した。彼女は僕の腕をつかむ。じんわりと魔力が抜けていく虚脱感を覚えた。

「小豆を洗ってほしい」

シャン。

「いえっさーです」

シャンシャンシャン。

手に持つマラカスを振り、音を生み出す。

「アズ、この音は何の音だい？」

「……小豆を洗う音です」

シャンシャンシャン。

「そっだよね。でもあずき洗ってというのは、山の中で小豆を水で洗う音が聞こえた……というよ
うな怪異譚が元になった妖怪らしい」

シャンシャンシャン。

「なら、アズ。——君の存在を定義しよう」

……シャンツ。

アズは動きを止める。

ハナは僕に召喚した妖怪のスキルを決めろと言った。しかしそれは誤りだ。妖怪の情報は既に存在が契約の本に記載されている。

ならば僕ができることは。

「あずき洗い、君の正体は……」

シャン。

「……音だ」

シャン。

——僕ができることは、彼女の定義された内容を状況に合わせて抽出すること……。つまり、良いところを見つけてあげるってことだ。

「その音が発生する原因は、木々のざわめき、小動物の戯れ。そして——」
アズがぎゅつと僕の腕を抱きしめる。

「——川のせせらぎ」

シャン、シャン、シャン。

「……合格です、^{マスター}主」

彼女は僕をねぎらうように、マラカスを鳴らす。そして僕の腕を離れ、薄暗い坑道で踊りだす。

シャンシャンという音と共に数秒間の幻想的な舞いを踊った後、彼女は腕を伸ばしてピシッとポーズを決めた。

「おーれいっ」

彼女は動きを止める。マラカスの音も止まった。

しかしそれと同時にピシヤリ、という小さな水音が廃坑の奥から聞こえた。

「……あ」

彼女は突然そう言って、スッと姿を消す。

「ん？　どうかした？」

「主」

どこからかゴゴゴ、という地響きが聞こえた気がした。

「逃げた方がいいです」

「は？」

僕がそう言った瞬間、廃坑の奥から押し寄せた横殴りの鉄砲水に呑み込まれた。

☆

「はっはっはっ！　すげーじゃねーか！　坊っちゃん！　いや、先生！」

夜の酒場。そこで僕は皆の笑顔の中心にいた。

テーブルの上には多くの皿が並んでいる。水を村にもたらした救世主として僕はもてなされていた。

とはいえ、そこに並んでいるものは乾燥豆や燻製肉くんせい、キュウリの酢漬けなど質素なものだった。

彼らはそれすらにも手を付けようとせず、僕に食べるようすすめてくれる。これ以上の食材は本当にこの村には無いようだった。

気を遣わせても申し訳ないので、それらを口に入れてみる。

「……んんんっ……!!」

酸っぱい……!!

僕は気合を入れて声を抑えた。

それは今まで食べたどんなものよりも酸っぱいのではないかという強烈な酸味だった。匂いだとか風味だとかそういうもの、すべてを超越した酸っぱさは、僕の舌を焼き付かせる。

僕は慌てて手元の水を飲み、一息ついた。

……これはこの村の食糧難を解消しないと、まともな野菜を食べることはできないのでは……？
僕がこの村の食糧事情を案じていると、エリックが口を開いた。

「いやー、それにしても坑道の前で倒れてたときはびびったぜ」

僕は水浸しになって倒れていたところを、轟音に駆けつけたエリックに救助された。

彼が確認したときにはもう大量の水は無くなっていたが、どこからか発生した綺麗な湧き水が
坑の奥から流れてきているらしい。

これまで水っ気が無かったことは地質の調査でわかっている。どこから湧いたのか、他の坑道への影響はあるのか……様々な問題が同時に発生したが、それでも明日飲む水を心配する必要はなくなっただ。

川とは、山の湧き水が斜面を流れて形成されるものだ。その音が聞こえてくる場所は、山の中ぐらいにしかないだろう。なのでそんな場所を探した結果、廃坑にたどり着いたのだった。

これから長い年月が過ぎれば、その湧き水が岩盤を削り川となるのかもしれない。
エリックがガシガシと僕の頭を撫でる。

「先生に魔術の心得があるだなんてなあ！ 最初から言ってくれよ！ 人が悪いぜ全く！」
ハハハ、と僕は乾いた笑いを漏らした。

僕はあの廃坑の湧き水を、僕の魔法で発生させたことにした。

その理由は二つある。

もちろん一つは僕の印象を良くするためだ。有言実行。これで初日に言った「生活をより良くする！」という宣言は一応満たされたと言ってもいいだろう。

そしてもう一つは……きっぱり魔法のせいだと言った方が心穏やかに水を利用できるからだ。これが理由もわからない状態だと、安心して飲めなくなってしまう。例えば魔族が毒を流したとか、鉱山全体に崩落の危険があるとか……根も葉もないのにそんな噂が流れる可能性もあるだろう。

だから今回のことは「天才魔道士が起こした奇跡」にしてしまったのだ。
どうせなら、みんな幸せの方がいいだろう？

……ただ一つ問題があるとすれば。

「おい先生！ ついでにこいつ、金鉱石に変えてくれよ！」

別の男が役に立たないクズ石を僕に差し出す。

「——いえ、すみません、そういうのは……ちよっと。僕の力不足で」
周囲がドツと笑いに包まれる。

もちろんそんなことは僕にはできない。

魔法使いなんていうのは、真つ赤な嘘なのだから。

——まあ僕の良心の呵責かしやくなどは、些細ささいな問題だろう。
きつとね。

☆

祝賀会から帰り、僕は寢室のベッドに腰を下ろして今日一日の出来事を思い返す。いろいろなことがあつた一日だつた。

僕の腰かけるベッドは、昨日の客室のものとは違って広く綺麗で快適だ。

ハナに「主様あつては主は主様なのでですから主人の寢室を使うべきです」と力説され、今日から僕はこの広いベッドのある部屋で寝ることにした。部屋の中はハナの力により眩まぶしいぐらい綺麗になっている。このぐらいの芸当は楽々とできるらしい。

掃除をしなくていいというのは何と快適なのだろうか。

今日は疲れたのもう寝てしまおうかな……。

そう思った僕は、四肢を投げ出してベッドの上に大の字になる。

すると唐突に、耳元で声が聞こえた。

「……主マスター」

「うわっ！」

声をあげて飛び起きると、そこにはあずき洗いのアズが立っていた。いつの間に部屋に侵入していたのだろうか。

「ど、どうしたの？」

僕の問いに彼女は抑揚を付けず答える。

「けーやくの話、しに来たです」

「あ、そっか！」

危ない忘れていた。

召喚した妖怪とは、魔力のやり取りの他にまた別の契約が発生する。アズの場合は先に働いてから後払いの形でいいと言ってくれたので、その言葉に甘えていたのだった。

「アズは何が欲しいの？」

僕にできることであれば、できる限りのことをしてあげよう。

なにせ、彼女はこの村を救った一番の功労者なのだから。

彼女はあずきとその願いを口に出した。

「……小豆」

「……………アズキ」

それはそつだ。

あずき洗いなものだから、小豆が好きなのだろう。

「小豆王国を作るです」

「アズキ王国」

「そこには餡子あんこミュージアムがあります」

「アンコミュージアム」

「まずはおまんじゅう。これは餡子を小麦粉の皮で包んで蒸した、基本にしてパーフェクトな品です。口に入れば生地と餡子が口の中で絡み合い、その濃厚な甘さを口の中に広げてくれるです」

アズは矢継ぎ早に話し始めた。

「そしてようかん。これは寒天を用いて作るぷるんとした食感が嬉しいスイーツです。柔らかな歯触りとは裏腹に、その甘さはさらっとした雪解けのような味わいをもたらしてくるです」

アズはまるで懐かしい思い出を語るかのように、遠くを見つめた。

「そしてぜんざい。白玉やフルーツを浮かべた、まるで小豆という海に浮かぶ常夏のアイランド！小豆で優しく包み込まれたお餅もちや果物の味わいは筆舌に尽くしがたいです」

「常夏のアイランド」

「小豆を使ったお菓子たちが舞い踊る和菓子の祭典！この世のパラダイスとも言えるそんな楽園を、アズは是非とも味わってみてーのです！」

「ワガシの祭典……」

頭が痛くなってきた。

「そのためには小豆！小豆が大量に必要です！」

「そ、そうか……。でも大量と言っても……」

小豆とは植物で、その種子を食べるらしい。

しかしこの周辺の街で育てているという話は聞いたことはない。

「……これです」

そう言つて、アズは一粒の豆を手渡ししてくれた。赤黒い小さな種子。

「なるほど」

この辺で栽培が盛んな穂付き豆を赤く染めて小さくしたような豆だ。これは栽培して増やすことができるのだろうか。

「……この辺じゃ見たことないな」

「小豆……」

僕の言葉に彼女はシユンと落ち込んでしまった。しかし無い物は無いのだ。

「わ、悪い……！ 絶対に何とかするから！」

ええい、どうにかしないと。

彼女のおかげで村には水が戻ったし、僕も村のみんなと少しだけ打ち解けることができたのだ。

この恩には全力で報いなければ。

手の中の小豆を転がす。

「……ここ、これって美味しいの？」

僕の問いにアズはコクリと頷く。

「砂糖と煮込んで甘い和菓子を作ります」

甘味。

……甘いお菓子か。

今すぐに彼女が望む小豆を食べさせてあげることができないけれど……。

「それなら、これはどうか……」

家を出るときに持ってきた包みを開く。

……うん、まだ湿気てはいないようだ。

乳母の作ったクッキーを取り出して、彼女へと差し出す。彼女は訝しげにそれを受け取った。

「食べてみて」

躊躇なく口に運ぶ。

サクリ。

「……甘さが足りねーです」

うっ。甘味ジャンキー。

「——でも、まあ。これはこれで」

アズの様子がほぐれる。

乳母の作るクッキーは、自家製の卵を使ったお手製の焼き菓子だ。

乳母のクッキーが褒められるのは嬉しい。

「……そのうち小豆も何とかできるよにするよ」

「しょうがないので、そのときまで我慢してやるです」

アズは満足したように笑みを浮かべた。

……良かった。

しかし本当、契約ってやつは結構曖昧あいまいというか、なあなあというか……。

あれ？ そういえば。

「——ねえアズ。本との契約以外に、対価っていうのは必ず必要なのかな？」

僕の問いかけに、アズは首をひねる。

「そうとも限らねーです。最低限の魔力供給はアズたちのごはんなので、ごはんは絶対必要ですが、でも、ごはんだけだとやる気が出ねーです」

「……だよねえ」

うーん、遠慮しているのかな。

……よし。

「……ハーナさん」

部屋の中で呼んでみる。

返事はない。

扉をあけて廊下へ。呼びつけるようになってしまっただけで申し訳ないが、この館の中においてハナは神出鬼没なのでこちらから捜しに行くわけにもいかなかった。

「ハーナー！」

「はいっ！」

シユタツと音を立ててハナが廊下に登場する。彼女は少し肩で息をしていた。

……走ってきたのだろうか？

「……ごめん、急ぎの用事ではなかったんだけど」

「いえいえ！ お気になさらず！」

どうやら自室の中までは感知範囲の外らしい。プライバシーへの配慮が行き届いており大変よろしい。

「ハナ、契約の対価についてだけど……」

彼女はそ一言で察したのか、目を伏せる。

「……は、はい。わたしは既に主様あかしさまにお仕えていますので……それで十分です」

違和感。

彼女の様子は、僕の乳母が「坊っちゃんは出来る子ですよ。きっとそのうち何かの才能を發揮します。えっと、特に例は思いつきませんが……」と励ましてくれたときの様子にそっくりだった。

——くそ！ つまり嘘だ！

……言ってて悲しい。

まあつまり、遠慮しているのだろう。彼女は。

「……これ、前に気にしてたよね」

クッキーの包みを渡す。

「あ……お煎餅……!!」

ハナが顔を輝かせた。

オセンベイ、というのが何かはわからないが、似たようなお菓子でも知っているのだろうか。

「いま君に返せるとしたらこれだけなんだけど……もしよければ、受け取って欲しい」

彼女はその手の中の品と、こちらの顔を交互に見比べる。

「あ、食べていいよ。それはうちの乳母の作った奴でさ。味は僕が保証するから」

ハナは包みを開いて一枚取り出し、口に運ぶ。

サク。

思っていた感触と違うのか、彼女は不思議そうな顔をしながら咀嚼そじやくを始めた。数口噛むと、眉まゆを

寄せつつ口元に笑みを浮かべる。

「おいひい……」

ハナは目を輝かせてゆっくりと味わい飲み込む。

「……甘くて柔らかいお煎餅だ……。硬いひすけっと、とは違う感じですね……。ふわー……」

彼女の声にホッと胸をなでおろす。気に入ってくれたらしい。

「砂糖と麦粉に卵とバターを練り合わせて……」

そう言いかけて、乳母のエプロン姿を思い出す。

僕は領主の仕事なんて何一つ手伝ってこなかったけど、乳母と一緒に焼いたクッキーの作り方は憶おぼえている。できることなら、焼き立てをハナに食べさせてあげたいな。

……うん、一つの目標だ。

「……僕も作れるからきつといつか作ってあげるね、ハナ」

ハナは頷いた。

「……はい。ありがとございます、主様……」

彼女は僕の手を取る。

「本当に……あなたが新たな主^{あか}で良かった」

ぎゅっと握りしめられる。

「願わくばこの身消え果てるまで、お仕えさせていただけますように。——本当にありがとございます」

ハナの言葉に少しだけ照れくさくなって、僕は「ああ」とだけそれに答えた。

そうしてその日は魔道具の灯^{あか}りを消して、ベッドに横になる。

村の人たちにくらかの保存食を振る舞ってもらったとはいえ、それは彼らの貴重な食料だ。悪い気がして、結局僕はあまりそれに手を付けられなかった。なので空腹じゃあないと言えば嘘になる。

僕の空腹もそうだが、彼らは普段から貧しい食生活を送っているはずだ。当然、栄養状態も良くはないだろう。

彼らはみんな、よそ者の僕を受け入れてくれて親切にしてくれている。実家の屋敷で食べていた

料理を思い出すと、そんな味をあつ酒場の人たちにも味わわせてあげたかった。

それにハナとアズもクッキーを食べているぐらいだから、食事を摂ることもできるのだろう。でも、この村の食糧事情を知って遠慮しているのかもしれない。

——みんなで美味しいものをお腹いっぱい食べられたらいいのにな。

僕はそんなことを思つて、村のために何ができるかを考えてみることにした。

一面の荒野に、金が出ない鉱山。

……うーん作物を自家栽培してみるか？ 小豆あずきも作らなきゃいけないし……。ああでも、作物が育たないって言つてたなあ。水不足が根本的な原因なんだろうけど……。うむむ。

ベッドの中でいろいろと考えを巡らせていると、ふと人の気配を感じた。スツと衣きぬず擦れの音がする。

……ハナ？

……それともアズ……？

いや、どちらにしても……これは……。

ドクンドクンと心臓が高鳴る。

いや、相手はアンテッドであり従者であり良き隣人である。落ち着け僕。

そつこう考えているうちに、左手に柔らかな感触。

「……主様」

ハナ！

右手に新たな感触。

「……主^{マスタ}」

アズ！

……えっ二人!?

思わず目を開けると、そこには左右に寄り添う二人の姿があった。

「あ、ふ、二人とも、何を」

喉^{のど}が枯れたように引き絞った声が出る。

「主様、どうやらなかなかお休みになれない様子」

「お手伝いです」

ま、まさか添い寝でもしてくれ——あつ！ いや違う！ これ罨^{ひな}だ！

「ストップストップ！ これ魔力を——！」

「おやすみなさい、主様」

二人はにつこり笑って左右から体を押し付ける。それと同時に、全身を強烈な虚脱感が襲った。

「はふうーんっ！」

気の抜ける声とともに、体の力も抜けていく。激しい魔力の吸収は、全身にくすぐったいような

感覚を走らせた。

嗚呼^{ああ}、無情。ドレインタッチ。

彼女たちの体の感触など感じる暇もなく、意識は霧散した。

——ブラックアウト。

☆

翌朝。

頭はスッキリ、体の疲れもサッパリ。驚くほどスムーズに起床した。

寝具が良いのだろうか。それとも魔力枯渇による意識の喪失には、そんな副次的効果もあるのだろうか。

魔力は睡眠時に最大効率で回復することは魔術論文にて証明されていると、兄上が言っていた気はする。まあ魔力には他にもいろいろ回復手段はあるが、なによりもそれが一番手軽で効率が良いよって、眠る前に限界まで魔力を吸い尽くすという鬼畜の所業は、理にかなった手法なのかもしれない……。

……だが僕の気持ちはどうなる。

裏切られた……！……そう。裏切られたのだ！ 何に、とは言わないが。

そんなどうでもいいことを考えながら着替えを済ませ、リビングのソファに座る。そして昨日汲んできた水を、備え付けの魔道具で温めて飲んだ。

うーん、無味無臭。まあ当然なだけだ。

これが実家なら美味しいパンとミルクにサラダなんかがついて……といった朝食になるが、残念

ながらそんなものは存在しない。

……早急になんとかしなくてはいけないのは、食料の確保だ。

お金があるなら、街から輸送してもらおうという手もあるのだけれども……。流石に自給自足を今からやったとしても、食べられる作物が作れるのは数ヶ月あとのことにはなるだろう。果たして僕はこの村で生きていけるのだろうか。

「おはようございます、主様」

考え込む僕の前に、ハナが姿を見せる。

シャンシャンという音が鳴り、アズもその存在をアピールした。

「おはよう二人とも」

まあ、やることはたくさんある。

でも彼女たちとなら、きつと楽しく過ごせるに違いない。

「さて、今日は何をしようかな」

一日が、始まった。